

南出和余著

## 『「子ども域」の人類学 —バングラデシュ農村社会の子どもたち』

(昭和堂、2014年)

高橋靖幸

世界には数々の国や地域があり、その数々の国や地域のなかで人々の毎日の生活がそれぞれに送られている。そしてまたその人々の日常の生活のなかに、子どもの存在は当然の景色として溶け込んでいる。私たちは、自分たちの社会で普段から子どもたちと生活を共にしていることを特別不思議なこととは考えない。しかし、他の国や地域の様々な生活の状況に目を向け、自分たちの日常とは異なる子どもの生活の様子に触れると、子どもに対して当たり前と思っていたその感覚に揺らぎが生じることがある。どの国や地域にも「子ども」がいるということは、実は驚くべきことであるのかもしれない、というように。

『「子ども域」の人類学—バングラデシュ農村社会の子どもたち』もまたそうした私たちの子どもに対する自明性に揺らぎを与えてくれる著書である。本書は、バングラデシュにおけるあるひとつの農村社会の日常を、子どもたちの生活を中心に据えて描いた魅力的な著書である。合計一年に及ぶ長期的なフィールドワーク、緻密な観察の記録と分析、そして付録となっている映像作品が、バングラデシュ農村社会の子どもたちの生活を立体的かつ多角的に描出しており、それが良質なモノグラフとなって私たちに提供される。著者はひとり的人类学者としてバングラデシュの農村に入り、村人たちの生活に根を下ろして、彼らの何気ない日常や文化の様式を描く。たとえば、年齢の意識されない農村社会における子どもの成長に対する認識や「子ども」を示す語彙の多様性など、それらはどれも私たちにとって興味深い内容ばかりである。

本書のモノグラフが魅力的であるのは、ただ長期間現場の生活に入り込んでいたことだけが理由なのではない。村の子どもたちの生活世界に迫る本書のねらいからみたと、この村における研究者としての著者の立場が、重要な意味

を持ち得ていることに気づかされる。著者は村の大人たちとともに仕事をするのではなく、「毎朝、食事洗濯をすませると、まさに子どもたちと同様に、池の畔や屋根の軒下に腰をかけてぼーっとして」(97頁)生活を送ったという。こうした現地への著者の参与の仕方が、子どもの生活世界へのより緊密な接近を可能としたことは間違いない。村の生活で別段何かをするのではない異質な他者である著者が、小さな子どもたちに友好的に受け入れられたのは(本書のいたるところでそれを感じる)、子どもたち自身がまた村において特別な役割の与えられない、自由な時間におかれた存在であったからではないだろうか。そうした村の中での「役割の不在」という共通項が著者と子どもたちを強く結びつけたのだと思えてならない。そうした子どもたちとの強い信頼関係を得た著者だったからこそ、長期間にわたって現地に身をおく経験のなかで、子どもたちの生活世界の特徴を本書のなかで広く多彩に描き出すことに成功したのだと考えられる。

では、日本人である私たちが、異国の地バングラデシュの子どもたちの生活を知ることにはどのような意義があるのか。それは、子どもという存在の多様性や複層性にアプローチする視点を獲得できることに大きな価値があるのではないかと思われる。先ほども述べたように、どの国や地域にも「子ども」が存在していることは、実は驚くべきことなのかもしれない。プリミティブな社会であれ、近代的な発展を遂げた社会であれ、人類はこれまでそれぞれの社会の文化や叡智を次の世代へ伝承することで継続と発展を遂げてきた。「子ども」はいわば、そうした文化や叡智の伝承を実現するための「文化的な装置」なのであり、その「装置」のあり方(子どもに対する大人たちのまなざしやかれらを取り巻く実際の環境)を様々に変更させることによって時代時代の変化に対応してきたというのが、人類の歴史の本質であろう。それぞれの国や地域には、それぞれに固有の「文化的な装置(子ども)」が存在している。したがって異文化の子どもへの理解や関心は、翻って日本の子どもの生活や現状(日本の「文化的な装置」の有り様)を客観的にとらえる知見となって私たちの中に蓄積される。これこそが、私たちが本書の書見を通じて得ることのできる貴重な体験のひとつといつてよい。

そしてこのとき、本書の題名にもなっている「子ども域」という視点が、そ

の体験において重要な役割を果たしてくれる。「子ども域」は、本書においてバングラデシュ農村社会の子どもたちの生活世界の様子をとらえる際に使用される、本書オリジナルの概念である。本書は、「子ども域」の説明としてまず、子どもたちの行為主体性に着目する。子どもたちは日々繰り返される日常生活のなかで、自らの社会の役割を少しずつ確立していく。しかしその役割は、社会に身をおくだけで自然と確立されるものではなく、他者との相互行為を通じて築かれていく。このとき本書が重要視するのは、そうした役割が確立されていく他者との相互行為が、子どもたち自身の様々な関与や活動によって生み出されているという事実である。本書は、子どもたちが『子ども』という社会的制約にありながらも自由な実践を展開する(23頁)状況において、かれらの成長は達成されていくことを指摘し、またそのような領域こそが子どもの生活世界をとらえる際に重要な関心となることを強調するのである。

従来の子ども研究においては、社会がいかに関人を形成するかという問いに力点が置かれた。そのような研究のなかで、子どもは社会から一方的に影響のみを受ける受動的な存在としてとらえられてきたといえる。しかし、子どもは社会において周囲から「子ども」として認識され取り扱われると同時に、子ども自身が自らを「子ども」として認識しながらも当該社会において主体的に活動し社会の形成に関与する経験をもつ。そのような特徴を有した世界のなかで、子どもたちは毎日の生活を過ごしており、日々成長していくのである。本書は、大人たちの生活とは異なるが、社会の確かな日常の一部でもある、この子どもたちの生活世界特有の有り様を「子ども域」ということばで説明している。「子ども域」は、子どもと社会の関係を互いに影響を与え合う相補完的な関係(本書はこれを「交渉領域」と呼んでいる)としてとらえる概念であり、子どもの生活世界を説明する際に忘れてはならない重要な視点だといえる。

したがって、「子ども域」の概念はけっして、バングラデシュというひとつの国の子どもたちの姿を理解することに限定して用いられる概念ではない。「子ども域」への関心は、日本の子どもの生活世界をとらえる枠組みとしてもそのまま利用可能であり、むしろバングラデシュと日本の子どもの生活世界を比較する際の着眼点として「子ども域」の概念は有効と考えられる。子どもが社会のなかで「子ども」としてまなざされるあり方、そしてその社会のまなざしの

なかで子ども自身が展開する実践。「子ども域」という関心から様々な国や地域の子どもの生活世界へ接近することにより、世界における子どもの多様性や複層性への理解の道は開かれ、日本の子どもの生活世界を相対的にとらえるための知見が獲得される。本書を通じて私たちが得るものは、まさにそうした日本の子どもを相対的に理解し考えるために有効な多くの知見なのである。

本書における具体的な分析の内容、特に子どもと社会の関わりを読み解く具体的な参与観察の分析と考察は、第3章の子どもの遊び集団の研究、第4章の男子割礼の研究、そして第5章の学校選択の研究において展開される。第5章においては、学校での教育経験をもたない親世代と「教育第一世代」の子どもたちの関係性において、学校に行くことを大人のみならず子どもたち自身ができるように選択し、そこで子どもたちの生活世界がどのように紡がれ、そしてそれが農村社会の次の世代をどのように形成していく可能性を有しているのかが問われる。まさに、学校教育をめぐる大人たちの子ども観と子どもたち自身の活動が交差する「子ども域」が問題の中心におかれるのである。

こうした優れた本書ではあるが、教育の研究を専門とするひとりの読者として、学校選択の研究を読んで感じた要望を最後に記したい。本書では、子どもたちの生活世界において、年齢に対する意識がないからこそ、個人の成長差が十分に認められているという興味深い指摘が行われている。しかし学級制をひとつの特徴とする近代学校教育の普及にとって、年齢に対する意識は重要なものとなると予想される。こうした農村社会の文化と近代的な価値の交わる「社会変動期」の「子ども域」の変化を、子どもたちの学校経験がもたらす影響という点からさらに分析と考察を試みて欲しかった。本書のねらいからは外れた要望とは思いますが、本書の内容が魅力溢れるものであったからこそ、読者として多くの示唆を受けた次第である。

本書は、本学会の2015年度「特別研究奨励賞」を受賞した。本書が本学会の多くの会員に読まれ、子ども社会研究の次の発展をもたらしてくことを願って止まない。